

日本弁理士会関東会設立20周年 記念講演会・記念式典

イベントレポート

生成AIが変える知財の世界

関東会20周年で見た、これからの 弁理士の役割

「弁理士の集まるイベント」と聞くと、お堅い式典や難しい法律の話ばかり……そんなイメージを持っていませんか？2026年2月13日、東京・明治記念館で「日本弁理士会関東会設立20周年記念講演会・記念式典」が開催されました。「参加者の皆様に少しでも和む時間を過ごしていただきたい」との思いから1年以上におよぶ入念な準備を経て、あたたかな雰囲気でも幕を開けました。

関東会といえば、全国の弁理士の66%が所属し、関東地域の1都7県で成り立つ日本最大の地域会です。

「地域のイノベーションは知財から」というスローガンを掲げ、第1部の講演会から第2部の式典、第3部の祝賀会の3部構成で開催された20周年記念事業。知財のプロフェッショナルである弁理士たちは今、地域の現場で何を考え、どこへ向かおうとしているのでしょうか？驚きと発見に満ちた当日の様子をレポートします！

特許庁から地元企業まで。

多様な視点が交差した熱いパネルディスカッション

記念事業実行委員会委員の相田 悟氏による司会で記念講演会が幕を開け、日本弁理士会関東会会長の榎本 英俊氏の開会挨拶に続き、基調講演とパネルディスカッションが行われました。



基調講演の壇上に立ったのは、特許庁特許技監の安田 太氏です。「知的財産を取り巻く環境の変化と最近の特許庁の動き」と題し、生成AIの技術革新が激しい時代の中で、知的財産制度や特許庁の審査の運用に関する最前線の動向が共有されました。



続くパネルディスカッションのテーマは、本イベントのスローガンでもある「地域のイノベーションは知財から」。ここで目を引いたのは、パネリストの多様な顔ぶれです。関東経済産業局 知的財産室長の遠山 嘉奈氏、栃木商工会議所の東郷 彬氏、リトルピアニスト株式会社 代表取締役の倉知 真由美氏、巣鴨信用金庫すがも事業創造センター課長の菊田 昌弘氏が登壇。官公庁、商工会議所、企業経営者、地域金融機関と、まったく異なる立場の4名が一堂に会し、日本弁理士会関東会幹事の渡邊 泰帥氏の進行で、それぞれの視点が交差するセッションが展開されました。

歴代の思いが交差した20年の節目。地域社会に知財を根づかせるために



司会進行を実行委員の百武 幸子氏へバトンタッチし、プログラムは第2部の記念式典へと移りました。関東会会長の榎本 英俊氏は挨拶で「地域会の使命は、地域における知財の活性化です。地域のニーズの掘り起こしから始まり、ニーズに合った知財の専門サービスをタイムリーに提供することが不可欠です」と語り、これからの20年も、イノベーションのポテンシャルを秘めた関東地域の創造力が開花するよう、専門性と情熱を持って活動を続けると力強く宣言しました。



続く日本弁理士会会長の北村 修一郎氏の挨拶では、かつてご自身が関西会会長を務めた経験を引き合いに出し「関東会は関西会の3倍の規模で運営する、本当に大きくて勢いのある地域会」とその存在感について語る場面も。さらに「日本弁理士会がどれだけ活動を考えても、最後の最後は、地域に存在する企業に寄り添う弁理士が活躍してくれるかどうかにかき尽き」と、多様な課題に向き合い、地域社会に知財を根づかせる重要性を語りました。

挨拶文はAIに相談？元関東支部長が語った「AI時代に問われる弁理士の役割」



式典の中盤では、関東会の20年を支えてきた功労者への表彰へ。関東会会長功労表彰者として7名、会務功労表彰者として118名の会員が選出され、会務功労表彰者を代表して高橋 俊一氏に表彰状が授与されました。

関東会会長功労表彰者を代表して壇上に立ったのは元関東支部長の久保 司氏。久保氏は、かつて「関東支部」と呼ばれていた発足当時を振り返りました。どのような事業に取り組むべきか、どのような研修を行うべきか、手探りで知恵を出し合った日々。そして「関東支部」から「関東会」へと名称が変わり、組織として新たな一步を踏み出した歴史。20年分の記憶をたどる言葉に、会場は静かに聞き入っていました。

久保氏は、技術革新が加速する昨今、AIという言葉を目にしない日はないと前置きしたうえで、「実は内緒なんですけども、この私の挨拶も、AIにちょこっと相談をいたしました」と打ち明ける場面も。AIを使いこなしつつも、そこに責任を持つ姿勢が問われるのがこれからの10年であり、弁理士こそ時代の先端に立って社会を牽引する存在であると締めくくりました。



AIがどれほど進化しても、企業経営者の想いを汲み取り、最終的な判断と責任を引き受けて知財を守り抜くのは人間の弁理士です。産学官連携や若手育成を含め、次の10年も関東会がリーダーシップを発揮してほしいという久保氏のエールに、会場からは大きな拍手が送られました。

今回のイベントを通じて感じたのは、知財は決して遠い世界の話ではなく、地域の企業が新しい価値を生み出すための頼もしい力であり、それを熱量を持って守り抜くのが弁理士なのだ、ということでした。AIがどれほど進化しても、現場の想いに寄り添う弁理士の役割は変わりません。地域の企業と、知財のプロフェッショナルである弁理士。このタッグが、これからの関東地域をもっとおもしろく、もっと活気づけてくれそうです！